岩手県立大学看護学部紀要11：59－70，2009
Journal of the Faculty of Nursing, Iwate Prefectural University

■研究報告■

# 若者の自主企画による
# 性の健康とセクシュアリティに関する情報発信の効果

福島裕子

# Effect of dissemination sexual health and sexuality by the young man's independent project.

Yuko Fukushima

要　旨

性の健康問題やセクシュアリティに関する情報発信のための若者の自主企画によるイベントを実施した。イベントではセクシュアルマイノリティの方と学生のトークショーや講演のほか、ポスター展示やコンドームの配布を行った。参加者へのアンケートの結果、次のことが明らかとなった。1．学習効果として、9割以上の参加者が「大変学びがあった」「ある程度学びがあった」と認知していた。自由記述でも学びにつながったという感想が多くみられた。2．10代や20代には、「ちゃんと避妊しようと思った」「自分の体を大切にしなければと実感した」など、今後の行動変容に結びつく効果もあった。3．岩手県ではほとんど情報がない性の多様性について、事例を通して学ぶことが、自分自身の存在や生き方、社会のあり方を考える機会になっていた。4．参加により、今後何か自分でもやっていきたいという気持ちになったり、もっと多くの人に聞かせたいなど、エンパワーメントにつながっていた。5．多くの参加者は、今回のイベントを肯定的にとらえ、思春期保健で若者が若者に向けてメッセージを伝えていくことのニーズも高くあった。

キーワード：ピア、若者、性の健康、セクシュアリティ

## Ⅰ．はじめに

近年、青少年をめぐる性の健康問題が社会的に注目されており、またセクシュアリティの多様化もめまぐるしい時代となっている。岩手県においても例外ではなく、若年者の人工妊娠中絶実施率や性感染症の罹患率は全国でも上位にあり、次世代を担う青少年への性の健康教育が大きな課題となっている[1)2)]。また、セクシュアルマイノリティーズが声を上げ、顕在化してきたとはいえ、岩手県ではまだまだ情報が少なく、性の多様性への理解も十分とはいえない。

これまで学校現場での伝統的な性教育はinformation-based educationであり、妊娠のしくみや避妊方法、性感染症などの「知識の教育」に重きが置かれてきた。しかし、従来の知識の教育だけでは青少年の性行動変容には効果がないことが分かってきている[3)]。そして海外では性の知識教育のみならず他者とのグループディスカッションや、相互交流をしながらの地域サービスやボランティアの活動をすることが性行動を抑制することも報告されている[4)5)6)]。

日本においては、性教育のとらえ方にはまだ幅があり、いつ、どこで、どうやって、どこまで性の知識を教育するかは、21世紀に入ってからも大きく議論されてきている[7)]。しかし、性教育は生き方の教育であり、人間教育、人生教育であるという考えは基盤になっており、性の知識の提供だけではなく、それとともに人間関係の力を育て、命の素晴らしさ、大切さ、そして自分の存在を肯定できるようなアプローチが性教育には求められている[8)9)10)11)]。若者の性行動を変容させるためには、一方的な知識の提供ではなく、仲間同士の関係を通した気づきや、自分にひきつけて考える場が必要であり、生き方を含めたセクシュアリティへのアプローチが

受付日：平成20年11月４日　受理日：平成20年12月25日

重要となってきている。

そのような現状の中、岩手県内では若者によるピア（peer）カウンセリングやピアエデュケーションが活性化しつつあり、思春期保健の新しい動向として期待されている。

「岩手県思春期の健康を考える会（通称「いわし会」）」は平成17年に設立された岩手県内で思春期保健活動に取り組んでいる学生の自主組織である。会員は岩手県立大学の「ピアいぷ」、岩手県立二戸高等看護学院の「ピア缶」、岩手県立宮古高等看護学院の「はぴ～」の学生およびそれらの団体のOB、OGで構成され、筆者は顧問をつとめている。各団体はそれぞれの地域でピア活動を行っているほか、「いわし会」として年に２～３回交流会開催やメーリングリストの活用を通して、情報交換やネットワーク化を図っている。また、HIV/エイズの予防啓発活動に取り組む全国の若者が、世界エイズデーに向けて一体となって展開するHIV/エイズ全国意識喚起キャンペーン「World AIDS Day Series（wAds：ワッズ）」とリンクしてキャンペーンを展開したり、市町村や大学、学校現場と連携したピア活動や自主研修会の開催にも取り組んでいる。「岩手県思春期の健康を考える会」の活動は、大学生や看護学生がPeer（仲間）として岩手の青少年たちと向き合い、ともに悩み、一緒に考えることで、自分は一人じゃないという温かい場所を提供することが基盤である。性に関する正しい知識の指導・啓発のみならず、中学生や高校生がありのままの自分を受け入れ、自分の生き方や在り方について自ら考える場を提供している。

活動を始めて4年が経過した「岩手県思春期の健康を考える会」では、これまでの活動を通し「若者が若者へメッセージを伝えることの大切さ」を感じてきた。

そこで今回、若者主催の性のイベントを企画し、性の健康問題やセクシュアリティについて若者から若者へメッセージを伝える会を開催した。そして、参加者の声からその効果を明らかとしたので報告する。

本研究は、岩手県でまだまだ未開拓の「性」という分野で、同年代から情報発信をした初の取り組みの報告である。また参加者の感想から、岩手県の青少年の性に対する学習ニーズや考え方、求めているもの、さらには世代が異なることでの性の価値観の違いを明らかにし、岩手県の性教育の今後の取り組みに多少なりとも示唆を与えることができるものと考える。

## Ⅱ．方法

(1)　自主企画のイベント開催までの流れ

各団体の代表学生16名で企画委員会を設立し、イベントの趣旨、テーマ、プログラムなどを検討した。企画委員にはサポート及び助言の役割として、岩手県保健衛生課保健師1名、宮古市保健福祉部健康課保健師1名、そして高校生を参画させたAIDSデーイベントの経験を持つ陸前高田市民生部健康推進課の保健師1名および顧問としての筆者が参加した。企画委員会の開催は、二戸市や宮古市の遠方からは何度も参加することが難しいため、平成19年11月、平成20年１月の２回であったが、メーリングリストを活用したメール会議を頻回に行い、企画を進めていった。企画委員が中心となって開催の趣意書および企画書を作成し、各関係団体に後援や共催を依頼し、岩手県、盛岡市、岩手県教育委員会、盛岡市教育委員会など複数団体から後援としての名称使用の許可、そしてコンドーム会社からは共催としてコンドームやポスター等の支援をしてもうことができた。

(2)　イベントのテーマ及びねらい

イベントのテーマは企画委員の学生メンバーで検討し、「ナウなヤングのメッ生ージ　～Say！生・性～」である。若者たちで性に関して話そう、語り合おうという意味を込めた、若者ならではのユニークな名称となった。

本イベントのねらいとして「１．性について、自らが情報を選択し、自己決定できるための正しい性の知識を身につけてほしい。」「２．様々なセクシュアリティがあることを知ってほしい。」「３．「自分や相手を大切にしてほしい」というメッセージを若者から若者へ、若者から大人へ発信すること。」の３つを掲げた。

(3)　開催日時

開催日時は平成20年３月８日（土）14：30～17：45で、場所はいわて県民情報交流センター（アイーナ）　８階　804会議室である。

(4)　プログラム

企画では、日ごろ情報を得たり聞いたりす

ることがほとんどない性的マイノリティの方のトークショーや、六本木診療所の赤枝恒雄先生の講演会をメインプログラムとし、各プログラムの合間に、ミニライブコンサートやダブルダッチのパフォーマンスを組み入れるなど、参加する若者が楽しめる内容を工夫した。若者が集まりやすい場所と時間にする、また、若者が興味関心を引く内容にし、配布物や掲示するもので情報提供ができるように工夫を行った。今回の企画の目的や意図、ねらいを企画学生から伝える場も始めと終りに設けた。

(5)　広報活動

美術系大学の学生が作成したポスターおよびチラシ（図１）を、県内のすべての高校、および盛岡市内の中学校に配布したほか、盛岡市内の若者が集まる主要な場所に配布し、広報を行った。

図１　広報に用いた学生作成のチラシ

⑹　参加者への質問紙調査

今回の取り組みの効果を明らかにするひとつの指標として、参加者を対象とした自記式質問紙による調査を行った。質問内容は、属性および、各プログラムがどの程度学びになったかを「大変学びになった」から「ほとんど学びにならなかった」までの４段階で尋ねるほか、参加して感想や意見、「岩手県思春期の健康を考える会」への要望や期待することを自由記述で問うものである。質問紙は参加者にイベント資料とともに配布し、イベント終了後に記載していただき、出口に回収ボックスを設置して回収した。

なお、調査は無記名であり、プライバシーは保護されること、強制ではないこと、調査結果はこのイベント評価のみに使用するものであることを事前に口頭で説明した。

## Ⅲ．結果

⑴　自主企画イベントの実際

参加者は県内の高校・大学生・専門学校生など10代～20代の青少年や一般成人のほか、産婦人科医師、助産師、養護教諭といった保健医療従事者や教育関係者など、およそ120名であった。

オープニングはよさこいチームの演舞で始まり、そこに続くトークセッションでは、「性的マイノリティの方と若者の対談」と題して、仙台を中心に活動しているＨＩＶ啓発チーム「やろっこ」の代表者を招き、岩手県立大学「ピアいぷ」代表者と対談形式で、同性愛というセクシュアルマイノリティの立場から情報発信を行った。トークショーの初めにはセクシュアルマイノリティの団体のパレード写真やメッセージを盛り込んだ学生自作の音楽つきスライドショーも流し、興味関心を引き付ける工夫を行った。トークショーでは同性愛者ということで自身が悩み、また偏見を持たれてきたことの体験や、人を愛することの意味、生きることの意味などについて、経験に基づいて語る場となった（図２）。

その後アコースティックギターミニライブ（図３）や、ダブルダッチのパフォーマンス（図４）を交え、東京の六本木診療所院長の赤枝恒雄氏による講演「いま君たちに伝えたいメッセージ～若者の街の診療所から～」が開催された。自身の診療所で性感染症や若年妊娠などの事例に多く接し、若者への性教育の経験も豊富な赤枝氏からは、性の健康問題の実態について具体的な事例にそって話題提供があった（図５）。会場内には展示ブースを設け、「いわし会」で行った性感染症実態調査（街角調査）の結果を報告したり、コンドームの展示・配布、性感染症の現状や性の多様性に関する情報提供、各団体活動報告などを行った（図６、７）。

⑵　参加者への質問紙調査の結果

イベント終了後に参加者に無記名のアンケートを実施し、61名から回答があった。

１）回答者の属性

回答者のうち52名（85.2％）が女性で９名（14.8％）が男性であった。年代および立場は図９，10に示すとおりで、10代が11名（18％）、20代が20名（32.8％）と、青年期が半数を占めていた。その立場は大学生、専門学校生がほとんどであった。社会人は28名（45.9％）で、職業の内容は医師、公務員、教員、養護教諭、保健師、看護師、助産師など、医療・教育関係者が多かった。（図８、図９）

２）参加者が認知する学習効果

各プログラムがどの程度学びになったと感じているかについて「大変学びになった」から「ほとんど学びにならなかった」まで４段階で尋ねた。その結果、いずれのプログラムも参加者の９割以上が「大変学びがあった」「ある程度学びがあった」と回答していた（図10）。特に赤枝氏の講演会については、全員が、学びになったと回答していた。学習効果の認知を年代ごとに比較してみると、講演会や会場展示はどの年代でも９割以上が学習効果があるとしている中で、セクシュアルマイノリティの方のトークセッションに関しては、若干年代による学びの度合いに差が見られ、10代の１名（9.1％）と40代の３名（23.1％）が「あまり学びにならなかった」と回答していた。

３）参加者の意見・感想（自由記述）

イベントに参加しての意見や感想を自由記述で尋ねた。年代ごとの記述内容を表１に示す。10代20代は記述された内容をすべて、30代以降は抜粋して記載している。

どの年代でも、「とても勉強になった」「ためになった」「学べた」「参加できてよかった」

図２　トークセッションの会場の様子

図３　アコースティックギターのミニライブ

図４　岩手県立大学のダブルダッチチームのパフォーマンス

図５　赤枝氏の講演「今君たちに伝えたいメッセージ」

図６　コンドームの展示と配布のコーナー

図７　性の多様性に関する情報提供の掲示

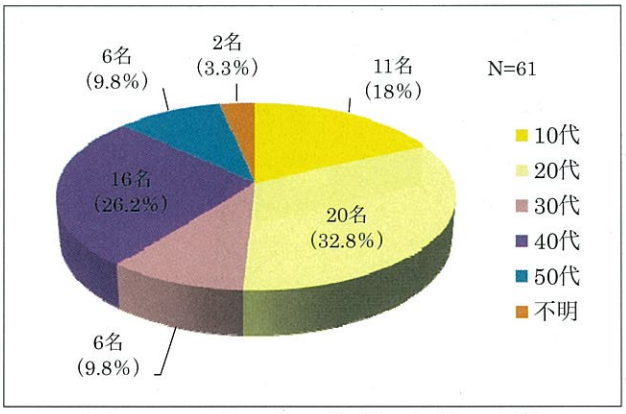


図８　アンケート回答者の年代の内訳

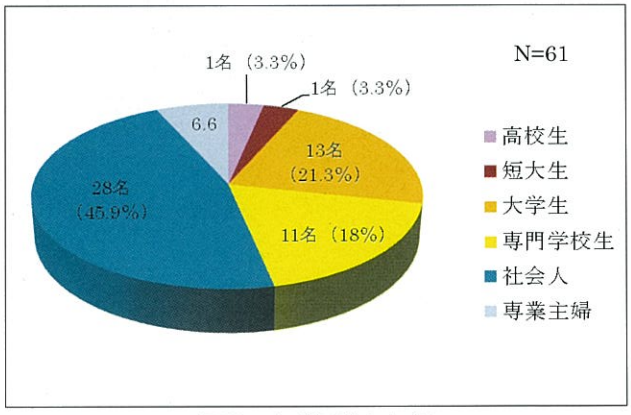


図９　回答者の立場

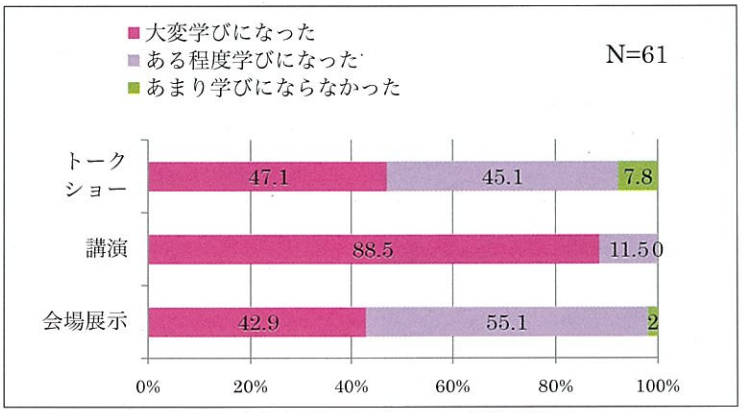


図10　参加者が認知する学習効果

表１　意見・感想の自由記述（抜粋）

| 10代 |
|---|
| ・実際にコンドームを触れたりしてリアルな体験ができました。(18歳　女性　専門学校生)<br>・ちゃんと避妊しようと思った。性感染症は怖いと思った。同性愛者の見方が変わった。コンドームありがとうございました。(19歳　女性　大学性)<br>・赤枝先生の話がためになった。性行為は一歩間違えれば一生傷を負ってしまうことがよく分かった。(17歳　女性　高校生)<br>・トークもおもしろかったし、性について学べることができてよかったです！それだけではなく、よさこい、ダブルダッチ、ライブというイベントもあり楽しんで見ることができました。(17歳　女性　高校生)<br>・自分の世界を基準にして考えるから偏見や差別が生まれてしまうということを実感しました。“自分らしく生きる” ことができる社会に変わってほしいし、自分にできることがあったら協力していきたいと思いました。スライドに出てきた「同性愛者に生まれてきてよかった」いう文字が感動的だった。(19歳　女性　専門学校生)<br>・貴重なお話をたくさん聞けてよかったです。性と生は奥が深いと思いました。(19歳　女性　大学性)<br>・トークセッション、ポスターセッションなどとても参考になった。ライブも楽しかった。(19歳　女性　専門学校生) |
| 20代 |
| ・赤枝先生の話は驚くことが多く、とても勉強になった。現実はかなり深刻な状態なのだと思った。(20歳　女性　専門学校生)<br>・赤枝先生のお話を聞き、やはり自分の体を大切にしなければと深く実感しました。とてもいい勉強になりました。もっといろんな人に理解してもらいたいと思います！(20歳　女性　大学生)<br>・とても勉強になりました。性感染症は身近な病気だということを改めて思いました。楽しい時間を過ごさせていただきました。(21歳　女性　大学生)<br>・自分の彼女も連れてくればよかった。今後の付き合いに役立つと思った。やはり安易に性行為に及ぶことはマズイということが身にしみてわかった。(20歳　男性　大学生)<br>・トークセッションでは初めてゲイの方のお話を直接聞くことができ、初めて知ることで楽しく聴くことができた。講演ではエイズや性感染症について楽しく学ぶことができてよかった。(20歳　女性　専門学校生)<br>・今回この場に来られてよかったと思います。楽しく学べて素敵な時間だった。セクシュアルマイノリティーズの方々も私たちと同じ自由に人を好きになれて、それに後ろめたさを感じない世の中を作らなければならないなぁ、理解を広めてそうなっていけばよいなぁと感じました。考え方や行動の違いを差別したりしないで認めて尊重していく姿勢をみんながもたなければならないと感じました。どうすればいいのか、私たちも考えていきたいです。(22歳　女性　大学生)<br>・とっても勉強になりました。将来助産師として性教育に携わっていきたいです。またこのような機会があれば参加したいです。(21歳　女性　短期大学生)<br>・性に関する一般的な情報について学校で学んできたが、自分の身近に思えていなかった。当たり前のように感じていたが中学時代の友達が間違った理解をしていることがあった。赤枝先生のお話を聞き、私たちの生活に寄り添ったお話をしていただき、若者がもっと性について危険性を知っていくべきだと思った。高校生や大学生にどれだけ命に関わってくることなのか、簡単に考えてはいけないということを聞く機会が多くあればいいと思いました。(23歳　女性　大学生)<br>・学び…というのもそうなんですが、何より楽しかったです！！スライドに「同性愛者に生まれてきてよかった」という看板があったが、同性愛者に限らず、ここに生きるみんなが「私が私に生まれてよかった」と思えたらステキだなぁと感じました。(22歳　女性　大学生)<br>・準備大変だったと思う。学生主体でここまでできてすごいと思う。(22歳　女性　大学生)<br>・性に対する皆さんの前向きな姿勢を感じました。多くの方にこのような講演を聞いてもらいたいです。(20歳　女性　大学生)<br>・新鮮だった。またこのような機会があれば参加したい。(20歳　女性　大学生) |
| 30代 |
| ・同性愛者の立場を初めて考えるきっかけになった。性感染症の怖さと若者が結婚するまでコンドームをつけるべきこと、風俗や出会い系サイトに手を出さない、近づかないことを理解できた。ギター演奏など盛り込まれていて楽しかった。(33歳　女性　専業主婦)<br>・安全な妊娠・出産は思春期からの対策が大事だと再確認した。(30歳　女性　保健師)<br>・セクシュアルマイノリティーズは身近に感じたことがなかった。多様なセクシュアリティーを受け入れる社会の成熟度を感じる。ゲイの方へのＨＩＶ予防の理解の難しさを感じる。(44歳　女性　社会人)<br>・初めてゲイの方のお話を聞くことができました。もっとお話を聞きたかったです。(46歳　女性　保健師)<br>・当事者となる若者に訴えかけることは効果的で大切であると感じました。私も微力ながら性指導の授業をできるだけ周囲を巻き込んで実施、協力してきたがエネルギーがいる。今回参加してさらに続けたいと思った。(50歳　女性　教員)<br>・赤枝先生のパワーに触れて勇気をいただいた気がする。性教育を始めたばかりでまだまだなのですが、私にできることをしっかりやっていこうと思いました。(56歳　女性　助産師)<br>・若者が若者に向けて・・・というのがすごく新鮮です。(43歳　男性　産婦人科医)<br>・ひと肌のぬくもりに満ちた運営でよかったです。(40歳　男性　教師)<br>・楽しいイベントでした。若者のセンスを感じました。(40歳　女性　保健師)<br>・構えずナチュラルなイベントでよかった。(43歳　男性　公務員) |

など、学びにつながったという感想が多くみられた。特に10代20代の若い世代では、性感染症の怖さや安易な性行為の怖さなど性の健康問題の現状について学ぶことができたと具体的に記述しているものもおり、さらに「ちゃんと避妊しようと思った」「自分の体を大切にしなければと実感」「今後の付き合いに役立つ」など、今後の行動変容に結びつく記載もみられた。

「同性愛者の立場を初めて考えるきっかけになった。」「初めてゲイの方のお話を聞くことができた」など、普段耳にすることがない性の多様性に触れることができたという感想は、どの年代にも多く、特に10代や20代は「同性愛者に生まれてよかった」という文字が感動的だった。」「自分らしく生きることができる社会に変わってほしい」「性と生は奥が深い」「セクシュアルマイノリティの人も後ろめたさを感じない世の中を作っていくべき」など、広い気づきや学びの感想があった。30代以降の参加者には、トークセッションでセクシュアルマイノリティの方のお話をもっと話を聞きたかった、という感想も数名あった。

10代や20代は、「自分にできることがあれば協力したい」「また機会があれば参加したい」「将来性教育に携わりたい」「自分たちも考えていきたい」など、今後の意気込みを感じさせる記述や「もっと多くの人に聞いてもらうべき」といった前向きな感想もあった。大人の中には、「自分の行っている性教育実践をさらに続けていこうと思った」「これから育ちゆく子どもたちに伝えていきたい」「勇気をもらった」「自分にできることをやっていこう」など、今回のイベントに参加することでエンパワーメントされていることが伺える感想もみられた。

全体的に「楽しく学べた」「楽しい時間だった」といった感想がみられ、多くの参加者は、今回のイベントを若者らしいセンスで楽しいイベントでよかった、工夫されていた、と肯定的に感じていた。その一方で、テーマが不明確だった、トークセッションの時間が短かった、聞き取りにくかった、など学生の自主企画であることによる運営のまずさを指摘する意見もあった。

4）「岩手県思春期の健康を考える会」への期待・要望（自由記述）（表2）

今後に向けて期待することや要望することを自由記述で尋ねた。その結果、10代20代では「また開催してほしい」「また参加したい」という意見が多かった。30代以降でも、ほとんどが「若者ならではの切り口でどんどん活動を広めてほしい。」「行政だけでは企画できないことを今後も計画・実行していただきたい。」など、今回のような若者主体によるイベントや啓発活動を望む意見であった。

## Ⅳ．考察

今回は岩手県で初となる若者企画のイベントを開催した。

わが国の「健やか親子21」における思春期保健対策の計画策定検討会では、①学校における相談体制の強化、②保健所等の地域における相談体制の強化、③若者の興味を引きつけるメディアを通じた広報啓発活動の強化、④学校に

表2　「岩手県思春期の健康を考える会」に今後期待することや要望（自由記述　抜粋）

- また開催してほしい。（20歳　男性　大学生）
- また今日のような講演会があれば参加したいと思います。（17歳　女性　高校生）
- このような企画とても大切だと思います。引き続き、続けていけたらいいなと。（21歳　女性　大学生）
- 若者ならではの切り口でどんどん活動を広めてほしい。（31歳　女性　社会人）
- 性感染症の怖さや、同性愛者の理解を広めるよう、若者に向けてメッセージを送る活動をどんどん進めてほしい。（33歳　女性　専業主婦）
- 今後も10～20代の若者に向けてのイベントを多く企画してほしい。（44歳　女性　養護学校教諭）
- 「連続した活動」若者では難しいと思うが頑張って。（43歳　男性　産婦人科医師）
- 行政だけでは企画できないことを今後も計画・実行していただきたい。（46歳　女性　保健師）
- ピアコミュニケーションに期待しています。（43歳　男性　公務員）
- どんどん輪を広げていってください。（50歳　男性　公務員）
- このような企画を県内のあちこちでさらに開催してほしい。（50歳　女性　教員）
- 今後も様々なイベントを展開して、会の活動を広めてほしい。（50歳　女性　養護教諭）

おける学校外の専門家などの協力を得た取り組みの推進、⑤同世代から知識を得るピア・エデュケーター、ピア・カウンセリングなどの思春期の子供が主体となる取組の推進、⑥メディアリテラシー向上のための支援、⑦インターネットなどの媒体を通じ思春期に関する情報提供や相談等を推進する、の7点が必要と指摘されている[12]。今回の「岩手県思春期の健康を考える会」で取り組んだイベントは、「1．性について、自らが情報を選択し、自己決定できるための正しい性の知識を身につけてほしい。」「2．様々なセクシュアリティがあることを知ってほしい。」「3．「自分や相手を大切にしてほしい」というメッセージを若者から若者へ、若者から大人へ発信すること。」の3つをねらいとしている。企画にあたっては、若者の興味関心を引き付ける「性」の多様性や健康問題をテーマとし、内容も若者を引き付けるような工夫を凝らした。その工夫のもと、若者として同世代や大人に伝えたいメッセージを発信した。この企画は、まさに「③若者の興味を引きつけるメディアを通じた広報啓発活動の強化」「⑤同世代から知識を得るピア・エデュケーター、ピア・カウンセリングなどの思春期の子供が主体となる取組の推進」にマッチする企画だったといえる。

参加者の感想からわかることは、今回のイベントに参加したことで、普段耳にしない性の多様性や 性の健康問題の現状について9割近くが「学びになった」と感じていたことである。岩手県では、若年者の人工妊娠中絶率が全国でトップとなった平成11年頃より、医師会や助産師会の働きかけにより、学校現場に医療の専門家が出向いて性の健康問題予防に向けた啓発教育が活発に行われるようになっていった。しかし学校現場の性教育は、青少年にとっては「学ばされている」という受け身の姿勢になりがちである。興味・関心を引き付ける内容や講義の工夫がなければ、なかなか実のある教育に結びつかない。しかし今回のような学校とは切り離した場所での啓発活動は、興味・関心のある若者にとっては、受け身ではなく自らが「聞いてみよう」という姿勢で臨むことが可能である。そこには興味・関心の高い青少年だけしか集まらない、という限界はあるものの、主体的な学習の場にしやすいという利点はある。特に今回のように、「若者から若者へ」向けたメッセージとして企画されたことに加え、単調な講演会だけではなく、ライブコンサートやダブルダッチのパフォーマンスなどを合間に組み入れることで、より若者が興味を持って楽しく参加し、それが「学べた」という実感につながったのではないだろうか。また、会場の垂れ幕から展示物まですべて若者の手作りものであったことも「楽しく学べた」ことにつながったと考えられる。

10代20代の参加者の感想には、性感染症の怖さや安易な性行為の怖さを具体的に実感し、「ちゃんと避妊しようと思った」「自分の体を大切にしなければと実感」「今後の付き合いに役立つ」など、今後の行動変容に結びつくものがあった。これは、今回の企画が多少なりとも岩手県の青少年の性の健康問題予防に効果を持つものだったと評価できる。その要因として、性の健康問題に第一線でアプローチしている医師の具体的な若者の事例を聴けたこと、その啓発に向けた各種展示を行ったことにより、リアル感を持って若者に受け止められたことがあるのではないかと推察できる。そしてもう一つの要因はコンドームの展示・配布を行ったこともあると考えられる。

性感染症予防のためにはコンドーム使用が一番よいとされていても、コンドームの配布などは学校現場の性教育では決して行われないことである。わが国では特定のパートナーとの性交時にコンドームを使用しているのは6割前後で、しかも「避妊」を目的としている事例が多い[13]。日本のコンドームの出荷率は性感染症の増加と反比例のように減少している実情があり、まだまだ若者に普及しているとは言いがたい。専門学校生を対象に介入研究を行った松本らの報告[14]によれば、HIV/AIDSやコンドームに関する知識だけを提供する教育よりも、具体的な事例を交えて考えたり、性交渉におけるライフスキルトレーニングやコンドームの正しい装着の演習による教育のほうが、コンドームの好ましい考え方や重要性の認知が高まっている。つまり実際にコンドームに触れることは、知識だけよりもより現実感があり、自分たちに身に引き付けて考える要因となるといえよう。

今回のイベントでは企業の後援によりコンドームを展示したり、参加者に配布することができた。若者が企画するイベントだからこそ、「自分の体や健康は自分で守ってほしい」というピアのメッセージを、コンドーム配布に込めることができた。今回コンドーム配布に関して10

代から「リアルな体験ができた」「コンドームありがとう」などの反応があった。これは、特に10代にとっては、具体的な事例の話とともにコンドームに触れることが、性の健康問題やその予防について身近に引き付けて考えるきっかけとなっているといえるだろう。

今回のイベントのもう一つのねらいは、岩手県ではほとんど情報がない同性愛など多様なセクシュアリティについて情報発信すること、そしてそこから、参加者に自分なりの生き方を考えてもらい、自分自身を大切にする気持ちを持ってほしい、ということであった。

性の多様性の教育は、日本ではまだまだ量的にも内容の充実やカリキュラムも不十分な現状がある[15]。特に岩手県は全くと言っていいほど教育の場で話題に上がることはない。今回その現状に、若者の立場だからこそできる企画として一石を投じることができたことは評価に値する。

今回の企画では、同性愛であることをカミングアウトし、同性愛者のためのHIV/AIDS予防啓発の社会的活動を行っている方をトークショーに招き、経験談や人生についての考えを語っていただいた。その結果、普段耳にすることがない性の多様性に触れることで、参加者は多くの気づきや学びを持つことができていた。伊藤[16]は、性の多様性を教育する場合、同性愛とは、トランスジェンダーとは、インターセクシュアルとは…などのように分類された知識を列挙するだけの教育は、一人一人の人間を把握させることもままならず、単なる「見世物」的な教育になってしまうため避けるべきだと述べている。つまり、今回のイベントにおいては、単なる知識の伝達ではなく、多様なセクシュアリティを生きる一人の人間の生きた経験が提供されたからこそ、参加者の深い感動と学びにつながったといえる。一方で、トークセッションに関して40代の参加者の２割が「あまり学びにならなかった」と回答していたが、ここには、同性愛などに対する情報をほとんど得てこなかった年代としての抵抗感も反映されていると考えられる。

人間の性は、一人ひとりの人間が名前、顔、身体、性格、思想や信条が異なるようにさまざまな存在である。浅井[17]が「さまざまな性を生きる視点とは、人間がより人間的に生きていくための創造的実践と強制的関係を築くために不可欠の能力である」と述べるように、性の多様性を知ることは、性的指向の種類や内容の知識を得るのではなく、人間個々の存在や生き方を考えることにつながる。今回参加者の感想でも、「自分らしく生きることができる社会に変わってほしい」「自分の世界を基準にして考えるから偏見や差別が生まれてしまうということを実感した」など、生きることと結びつけて広く学びとれていた。つまり、今回のように、一人の生きた存在である人間の経験を通して性の多様性について情報提供をすることは、現代の若者が「さまざまな性＝生を生きる」ことや「多様な人生の生き方」に触れることになり、自分自身の存在や生き方、社会のあり方を考える機会になるといえよう。

今回のイベントの参加者には、今後何か自分でもやっていきたいという気持ちになったり、もっと多くの人に聞かせたいなど、今後につながる意欲を持てた人もいた。岩手県で若者による性をテーマにしたイベントが初めてだったため、その意欲や活動に刺激を受けたことがエンパワーメントにつながったのかもしれない。今回のような若者主体によるイベントや情報発信をもっと県内で広く行ってほしい、と望む声も多くあり、県内の思春期保健において若者の力を活かした活動のニーズが高まっているといえる。そして、研究者自身、これらの活動を通して、取り組む若者自身も悩み、成長し、エンパワーメントしていくという手ごたえを感じている。岩手県では学生たちの活動をサポートする体制がまだ十分に整っているとはいえない。また、世代交代を経ても活動を活性化させていくためには、大人側のサポート体制のあり方も検討が必要であり、その点が今後の課題といえる。

## Ⅴ．結論

性の健康問題やセクシュアリティに関する情報発信のための若者の自主企画によるイベントを実施した。イベント終了後に参加者に無記名のアンケートを実施し、61名から回答があった。その結果、以下の点が明らかとなった。

1．学習効果として、９割以上の参加者が「大変学びがあった」「ある程度学びがあった」と認知していた。自由記述でも「とても勉強になった」「ためになった」「学べた」「参加できてよかった」など、学びにつながったと

いう感想が多くみられた。

2．10代20代には、「ちゃんと避妊しようと思った」「自分の体を大切にしなければと実感した」など、今後の行動変容に結びつく効果もあった。

3．岩手県ではほとんど情報がない性の多様性について、事例を通して学ぶことが、自分自身の存在や生き方、社会のあり方を考える機会になっていた。

4．参加により、今後何か自分でもやっていきたいという気持ちになったり、もっと多くの人に聞かせたいなど、エンパワーメントにつながっていた。

5．多くの参加者は、今回のイベントを若者らしいセンスで楽しいイベントでよかった、と肯定的に感じていた。そして思春期保健で若者が若者に向けてメッセージを伝えていくことへのニーズも高くあることが明らかとなった。

## 謝辞

本イベント開催にむけて精力的に取り組んでくださった「いわし会」の学生の皆様、およびアンケートのご協力いただいた参加者の皆様に深く感謝申し上げます。なお、本研究は、日本思春期学会平成19年度地域活動援助費の助成により行った。また、本研究の内容の一部は第27回日本思春期学会総会・学術集会において発表した。

## 引用文献

1）福島裕子，石井トク：高校生の性行動・性意識に関する調査，母性衛生，44(3)，190，2003.

2）福島裕子，石井トク：高校生の性に関する学習経験と学習ニーズ，思春期学，22(1)，85，2004.

3）Douglas Kirby：School-based programs to reduce sexual risk-taking behaviors,The Journal of school health 62(7)，280-287, 1992.

4）Douglas Kirby：The impact of school programs upon adolescent sexual behavior, Journal of sex research, 39 (1), 27-33, 2002.

5）O'Donnel, et al：The Effectiveness of the Reach for Health Community Youth Service Learning Program in Reducing Early and Unprotected Sex Among Urban Middle School Students, American Journal of Public Health, 89, 176-181, 1999.

6）O'Donnel, et al：Long-term reductions in sexual initiation and sexual activity among urban middle schoolers in the Reach for Health Service Learning Program. Journal of Adolescent Health、31 (1), 93-100, 2002.

7）浅井春夫，北村邦夫，橋本紀子，村瀬幸浩編：ジェンダーフリー・性教育バッシング，3－15，大月書店，2003.

8）文部科学省：学校における性教育の考え方，進め方，1－3，ぎょうせい，2000.

9）前掲書7）148-149

10）高橋史朗：間違いだらけの急進的性教育，107-108，226-255，黎明書房，1994.

11）村瀬幸浩：性教育が深まる本，232－240，十月舎，2002.

12）矢島陽子：「健やか親子21」における思春期の保健対策の強化と健康教育の推進について～中間評価と今後の展望～，思春期学，26(3)，287-291，2008.

13）山本多喜司，南　博文，中條和光：日本の大学生のＨＩＶ/AIDSに関する知識・態度と行動、日本健康心理学会第７回大会発表論文集，5～27，1994.

14）松本淳子，武田敏：ライフスキルトレーニング教育プログラムによるコンドームに対する青年の意識・態度の変化，思春期学，22(3)，337-344，2004.

15）橋本秀雄，花立都世司，島津威雄，他編：性の多様性教育，性を再考する　性の多様性概論，272，青弓社，2003.

16）伊藤悟："性的マイノリティ"の教材化試論，セクシュアリティ，4，36－43，2001.

17）浅井春夫：さまざまな性を生きるという視点を大切に，セクシュアリティ，4，4－5，2001.

## Abstract

An event for disseminating information regarding sexual health problems and sexuality was independently organized by youths. The event included talk shows and speeches by sexual minorities and students as well as poster displays and distribution of condoms. A questionnaire survey conducted on participants revealed the following: 1. Over 90% of participants reported that the event was "very informative" or "informative to some degree", indicating learning effects. Many participants also expressed learning effects on free response items. 2. Participants in their teens and 20s reported that they felt the need to "practice proper contraception" and to "take better care of personal health", indicating that the event contributed to future behavior modification. 3. Learning about sexual diversity, about which there is very little information in Iwate Prefecture, through case examples provided opportunities for participants to reflect on their own existence and way of life as well as social conditions. 4. Participation also led to empowerment, such as motivation to take further action in the future or to spread information to more people. 5. Many participants had a positive opinion of the event, and there was a great need for youths to educate other youths in adolescent health.


Key words：peer, young man, sexual health sexuality